

ダニエル・デフォー

『ペストの記憶』（15）

訳 武田将明
Takeda Masaaki

みんなといっても家事を切り盛りしてくれるおばあさんと、女の奉公人が一人、弟子が二人、そしてぼく自身がいるだけだった。さていよいよペストが近所で流行しはじめると、自分はどこに向かえばいいのか、どう行動すればいいのか、暗い物思いが尽きなかった。無数の悲惨な光景が、通りを行けばどこでも繰り広げられていて、とてつもない恐怖がぼくの心を満たした。まず病魔そのものが怖かった。実際、病にかかるのは恐ろしかったが、そのなかでも特におぞましい症状の人がいた。一般に首や股間に腫れものができるのだけど、これが硬くなってどうしても潰れないとものすごく痛くなり、その苦しみは、周到に準備された拷問にも匹敵した。責め苦に耐えられなくなった者は窓から身を投げ、あるいは銃で自身を撃つなど、自ら命を捨てた。この手の悲惨な光景を目にしたことが何度もあった。どうしても抑えきれず、痛みを誤魔化すため絶え間なくうめき声を上げ続ける人もいた。それで通りを歩くと

びに、荒々しく、悲惨を極めた絶叫が耳に飛びこんでくるのだった。それを思い描くだけでも心の底まで痛みを貫かれるけれど、このおぞましい裁きの手にも自分も捕まるんじゃないか、そんな懸念をずっと抱いていたのだから、なおさら辛かった。

正直に言うと、いまや自分で下した決断がゆらぎはじめた。氣力を失うことはなはだしく、おのれの軽率さを悔やんで胸が痛んだ。家から出て、いまお話しした悲惨な光景に出くわすたびにね。まったく、街に残ろうと決めたのは軽率だったと、ぼくは後悔したんだ。ぼくが居残り役を引き受けようなんて考えず、兄貴の一家ともども逃げていたらなあ、そう何度思ったことだろう。

恐ろしい光景の数々に怯えて、ぼくはしばらく自宅に引きこもり、もう外出はやめようと心に決めた。この決意は三、四日続いたのだろうか。そのあいだぼくは、ペストから自分を護り、また家のみんなも護ってくれた方に心からの感謝を捧げ、おのれの罪を誠実に告白し、神にこの身を委ねて日々をすごし、断食と謙虚さと瞑想によってその方にすがった。暇をみては本を読み、毎日の身の回りの出来事を覚書として残した。そしてこの覚書をもとに、後でこの本の多くが作られたのだけれど、それは戸外での観察に関わる部分に限られている。一人で瞑想するうちに記した内容は、自分だけにとっておくので、どんな理由があっても決して公にしないほしい。

ほかにもあのころ心に浮かんだ、神にまつわる瞑想も記し、おかげで自分の役には立ったけれど、他の人に見せるようなものではない。そんなわけで、この話はもうおしまいだ。

ぼくにはすばらしい友達がいた。医師でヒース氏¹という人だった。この悲惨なときに足しげく訪ね、いただいた助言がと

でも役に立った。ぼくが頻繁に外出するのを見て、そんなとき感染を防ぐために摂るべきものや、さらに通りに出たとき口に

¹ このヒース氏 (Heath) については注釈者によって説が分かっている。ランダは先行研究を参照し、これが本書に前に名前の挙がったナサニエル・ホッジズ (Nathaniel Hodges) のことだと述べている (Landa 271)。2011年9月号の注の繰り返しになるが、ホッジズの著作 *Loimologia* (『ペスト論』) は1671年にラテン語で発表され、1720年に英訳が刊行された。この英訳は、デフォーが『ペストの記憶』を執筆する際参考にしたとされる。マランはこのランダの説に対し、「他のほとんどの研究者は H.F. の医師の友人が虚構の人物だと考えている」と指摘する。その上で、F. Bastian が1965年に *Review of English Studies* の第十六巻で発表した説に触れている。それによると、コールマン街の教会の婚姻記録に、ジェフリー・ヒース (Jeaffrie Heath) なる名前の「教区の医師」の名があるという。しかし、本書のヒース医師は“physician”と記されているのに対し、ジェフリー・ヒースは“surgeon”であり、必ずしもデフォーがこの人物を念頭に書いたとは限らない。しかし他方で、コールマン街は H.F. の兄の帽子屋があった通りで、本書と無関係とも言いがたい (Mullan 234)。バックシャイダーはこの“physician”という肩書きにこだわり、当時の医師教会の名簿などを調べても“Dr. Heath”の名は見られないと指摘する。バックシャイダーは、むしろここでデフォーは冗談を言っているのではないかと考えて、例えばロバート・ヒース (Robert Heath) の詩に、ペストが流行しているときに患者の相手をせず、家に引きこもる金持ちの医者をも諷刺したものがあつたことを指摘している。あるいはこの“Heath”という名が、“health”すなわち健康との語呂合わせではないか、とも推察している。ちなみに、バックシャイダーはマランとは異なり、多くの研究者が (ランダとおなじ) ヒース医師=ホッジズ医師説をとっていると述べている (Backscheider 66)。

含んでおくべきものについて、たくさん教えてくれたんだ。彼もしょっちゅうぼくに会いに来てくれたんだけど、いい医者であるだけじゃなくて善きキリスト教徒でもあったから、この恐ろしい状況がどれだけ悪化しても、彼との会話は心に適い、とても力強くぼくを支えてくれた。

いまや八月に入り、ペストはぼくの暮らす地域でもひどく荒れ狂うようになった。するとヒース先生が訪ねてきてくれて、こっちがまだしょっちゅう通りに出ているのを知ると、家の人も子どもも固く閉じこもり、誰ひとり玄関から外に出してはならない、と真摯に説いてくれた。窓はすべてぴつたりと閉め、よろい戸とカーテンも閉ざして、二度と開けてはいけない。ただし最初に部屋でモクモクと煙を焚いておくこと。そのときは窓もドアも開けて、樹脂やピッチ、硫黄や火薬の類を燃やすこと。² ぼくらはしばらくそうしてみた。でも引きこもろうにも食料の蓄えがなかったから、みんなが完全に家の中ですごすのは不可能だった。けれども、あまりに遅すぎたとはいえ、ぼくはなんとかできないかと挑戦した。はじめに、ビールとパンを作る設備はあつたから、挽き割り粉を二袋買って来た。それから何週間も、自分たちのパンはすべて家のオーブンを使って焼いた。麦芽も買って、家にある樽をすべて満たすだけのビールを醸造した。これで五、六週間はみんなが凌げると思った。さらにかんりの量の塩気のあるバターとチェシャーチーズ³ も貯

² こういった刺激臭を放する煙によって空気が浄化されると、多くの学者が信じていた。焚火によって空気を浄化することの是非は、のちにも問題となる。

³ イングランド北西のチェシャー州とその周辺で伝統的に生産されるタイプのチーズ。濃厚でやや硬く、崩れやすいのが特徴。

めこんだ。ただ肉類がなかったのだけれど、肉屋や家畜を捌く業者のあいだでペストが猛威をふるっていたので、自宅の向かいに彼らが数多くいるのはわかってはいたけれど、通りをわたってそちらに行くだけでも安全とは言えなかった。

ここでもう一度述べておくけれど、こんなふうに食料を買いにやむなく出かけるというみんなの行動が、ロンドン全体に多大な被害をもたらしたんだ。外出中に他人の病気をうつされる人もたくさんいたし、食事の方が汚染されていることさえよくあった。少なくとも、そう考えていい根拠は大ありだった。そんなわけで、市場の人たちと外から街に運ばれた食料は病気とまったく無縁だったと繰り返し、確信をこめて語られているけれど、ぼくは本当かなあと思っている。確かなのは、ぼくの住んでいたホワイトチャペルの肉屋がひどくやられていたことだ。こうした店ではたいがいその場で殺した獣の肉を置いていた。感染が広まるとついには開けていられる店がわずかになり、残った店も、ホワイトチャペルよりさらに東に外れたマイルエンドの辺りで獣を殺してから、馬に乗せて市場へ運ぶようになった。

そうはいっても、金のない人びとは食料を蓄えられなかったから、どうしても市場に買い物に出かけなければならなかったし、自分で行かない人も奉公人や子供を使いに出さねばならなかった。しかも必需品は毎日新たに生じるわけだから、おびただしい病人が市場にやってきた。そして実に多くの人びとが、行きは健康だったのに、家に帰るときには死神を運んでいた。

けれども、人びとができる限りの予防策を講じていたのは間違いない。市場で骨つき肉を一片買うとき、肉屋の手から直接受け取ろうとはせず、鉤にかかっているのを自分で外した。対

する肉屋の方も金に触れようとせず、わざわざ酢を満たした壺を用意してそこに入れさせた。買う側はどんな半端な額でも支払えるようにいつも細かい金を持ち、お釣りをもらわないようにした。香料や香水の入った壺を手に持ち、その他役に立ちそうなものはすべて用いた。でも当時、貧しい人たちはそれさえもできなかったので、運を天に任せるしかなかった。

まさにこの市場について、日々悲惨な話が無数に語られた。この市場の真ん中で倒れて息絶える男女もいた。というのもペストに襲われた人たちの多くは、それにまったく気づかなかったんだ。やがて体内の腫れものが命に関わる部分を損ない、あっという間に死んでしまった。このために、たくさんの人が突然、なんの前触れもなく、路上でこんなふうに亡くなることもよくあった。なかには近くの家の前に張り出した露台や、戸口や玄関の庇まで行く暇のあった者もいたようで、その人たちは前に話したように、門前に腰を下ろすなり死んでいったのだ。

こんな光景が路上で頻繁に見られるようになり、ペストはいよいよ荒れ狂いだした。このころになると、通りを歩けば必ず路上のあちらこちらに死体がゴロゴロ転がっていた。それに対する反応はこんな感じだった。はじめのころこそ、人びとは通りすがりに足を止め、近所の人を呼んで出てきてもらっていた。でも後になると、まったく見向きもしなくなってきた。その代わり、遺体が転がっているのに気づいたら必ず道を横切り、その傍に近寄らなかった。せまい路地や通路の場合は引き返し、用を果たすために別の行き方はないかを探った。こういうときは決まって遺体は放ったらかしで、あとで報せを受けた役人が運んでいった。あるいは夜になって、死の車に付き添う埋葬人たちが遺体を回収し、運び去ることもあった。このと

き、こんな仕事を請け負う畏れを知らない連中は、必ず遺体のポケットを探り、いい服を着ているときは（実際、そういう遺体もときにあった）その身ぐるみを剥がして、手に入るものはすべて持ち去ったんだ。

でも市場に話を戻そう。肉屋の人たちは、誰かが市場で死んだ場合、すぐに役人を呼べるよう気をつけていた。そして死者を手押し車で回収してもらい、さらに近くの教会の墓地まで運んでもらっていた。こういう例は実によくあったから、今日のように「通りあるいは野原で死亡を確認」という項目で死亡週報に記録されることはなかった。単に疫病の一般的な項目に入れられるだけだったんだ。

（東京大学准教授）